異能者の非日常

毬藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異能者の非日常

【Ｎコード】
Ｎ５４５２ＢＡ

【作者名】
毬藻

【あらすじ】
昔の約束を守るため、少年は少女の下へ帰ってきた……。専属サポーターとして。（初投稿です。誤字脱字や変な表現があったらソフトにご指摘おねがいします。）

プロローグ　1（前書き）

ページを見ていただいてありがとうございます。
初投稿のため全体的にボロボロですが、よろしくお願いします。

プロローグ　1

「あのね、きのう……」

木の下で、二人の子供が話している……

と、言っても男の子が一方的に話していて、女の子の方は聞いているのかいないのかよく分からない。

「それで兄ちゃんが…」

それでも、男の子は話し続けている。

その時、女の子が口を開いた。

「そのときの？」

意味が分からなかったらしい男の子は首をかしげながら聞く。

「なに？」

「そのけが…」

言いながら指をさした先には、左腕に巻かれた包帯。

「ああ、ちがうよ。これはさっき父さんと鍛練したとき、一回よけそこねて…」

「いたい？」

一見無表情に見えるが、その紫色の目が包帯をじっと見ているのに気付くと手を振りながら言う。

「だいじょうぶ。全然いたくないよ。
それに、すぐ二人にやりかえしたから。」
「ふたり…？」

女の子の目が困惑を表しているのに気付くと、笑いながら、

「きょうから兄ちゃんもいっしょに鍛練してるんだ。父さんが、いつも結果がかわらないからつまんないって。一発いれたって、すごい喜んでた。」
「ふうん…」
「……だからね。」

また前を向いた女の子だが、今までより真剣味を帯びた声音に顔の向きをもとにもどす。

「もっと強くなって、かなたちゃんが危ないときは、僕が助けてあげる。」
「いつでも……？」
「うん」
「どこでも……？」
「うん」
「……」
「どうしたの？」

急に黙った女の子を不審に思って顔を覗き込もうとするが、急に女の子が立ち上がったことに驚いて尻もちをつく。

「帰ろう」

そのままの体勢で見上げていたが、女の子の頬が赤くなっているの

を見て、笑いながら立ち上がる。
そして、先に歩いていた女の子に小走りで追いつくと、手をつないで二人で家路に着いた。

……しかし、この穏やかな日々はあまり長く続くことは無かった。

プロローグ　2（前書き）

なんかいきなりシリアス（？）に・・・・
すみません…

プロローグ　2

……異変は急に訪れた。

久しぶりに彼方（かなた）が家に遊びに来ている時だった。

幼い頃から鍛えられた勘や聴覚で殺気を伴った複数人の侵入に気付き、彼方の手を引いて安全な場所に逃がそうとした。庭や家の中から死角になる場所にできた、小さな行き止まりの奥に彼方を連れていくと、

「ここにかくれてて。」

と、言って家の表……道場の方へと走っていく。

母屋の角を曲がると、父と兄が見慣れない二十人程の男を相手に必死に応戦していた。

しかし、そこが明らかに普通でないのは、火や石が空中に浮かんで二人を狙っているように飛んでいくからだ。

（！……異能者？）

敵の練度は高くないものの、このままでは多勢に無勢。

今は掠る位で済んでいる攻撃も、直撃するようになるのは時間の問題だろう。

現に、二人では守り切れなかったのであろう、母だったものが門の内側に転がっていた。

加勢しようと、一歩足を踏み出しかけたが、不意に最悪の場合が頭を過ぎった。

（あそこで訓練したことのある奴がいたら……かなたちゃんが危ない！）

すぐに踵を返すと、今来た道を引き返し始めた。

案の定、引き返した先には数人の男がいた。
気配を消している為かこちらに気づいた様子はないが、このままでは近づけない……と歯噛みしていると、奥から彼方が無理やり引きずり出されてきた。
乱暴をされた様子はないが、抵抗したのか膝を擦りむいている。
そこで、男の一人がおもむろに大ぶりのナイフを取り出し、彼方に向けて振りかぶった。

（危ないっ！）

走り始めるが、気配を悟られないよう、距離を空けていたために間に合わない。
彼方は、ナイフの刃を目を見開いたまま凝視して動かない。
そのとき、彼方の口が「よーくん……」と小さく動いた。

（っ！！）

それを見た良紀（よしき）は目の前が真っ白になった……。

『彼方ちゃん！！』

その時起こったことで良紀が覚えているのは、自分が彼方の名前を呼んだことと、今まで彼方を害しようとしていた男たちの四肢や落ち葉が、真っ赤に染まりながら自分たちの周りをまわっていたことだけだった。

数日後……

両親を失った良紀は、しばらくは彼方の家に居ることになった。
彼方が危険に陥った時に不可思議な現象が起こったため、彼方は異能力測定を受け、けして少なくはない異能の力を持っていることが分かった。
良紀は親戚を名乗る男に連れられ、彼方の家を去って行った。

……彼方の力では、精々木の葉を一枚程度浮かせることしか出来なかったという事実を知っているものは少ない。

――――――――八年後――――――――

『彼』は待ち合わせ場所になっている、異能力統括センター（アビリティ・コントローラー）――――主にセンターと呼ばれる――――内部のカフェに居た。
そこに、黒髪を腰まで伸ばした紫の目の少女が入ってくる。
手を振って合図を送ると、こちらに向かってあるいてくる。そして、

「あなたが……？」
「はい。」

『彼』は一時間前に出来上がったばかりの、センター職員証明証を見せながら言った。

「俺は、今日から専属になった中位サポーターの倉見良紀（くらみ よしき）だ。
……久しぶり、彼方。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5452ba/

異能者の非日常

2012年1月15日04時50分発行